2025 年 3 月 18 日
公益社団法人日本建築家協会
表彰委員会

2024 年度第 36 回 JIA 新人賞 決定のお知らせ

2024 年度第 36 回 JIA 新人賞受賞者をお知らせいたします。受賞者詳細は、添付書面にてご確認下さい。

受賞者	所属	作品名
玉田 誠　脇本 夏子	玉田脇本建築設計事務所	ROOF HOUSE
森田 一弥	森田一弥建築設計事務所	静原村の家

（応募登録順）

※2024 年度 JIA 新人賞は、2019 年 1 月 1 日より 2023 年 12 月末日（5 ヶ年）までに日本国内で竣工した建築作品を対象とし、審査が行われました。

・審査委員
室伏次郎氏、山本理顕氏、鍋島千恵氏

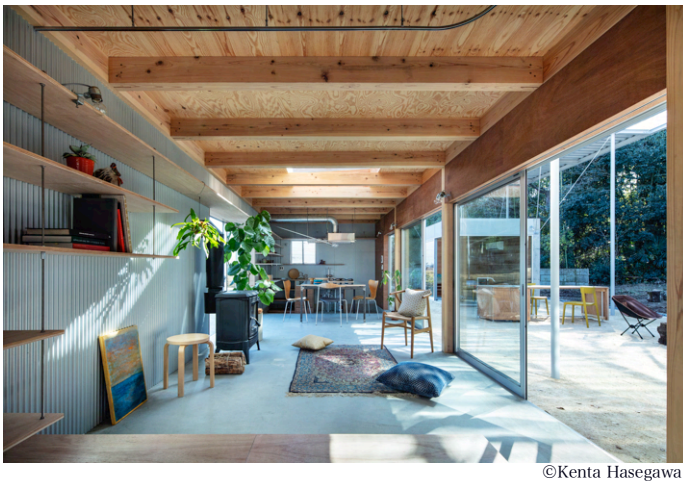
・実施状況につきまして
2024 年 9 月 5 日（木）　応募締切
2024 年 10 月 28 日（月）　第 1 次審査会にて応募作品 90 点の中から 11 点を選出。
2024 年 11 月 19 日（火）　第 2 次審査会（WEB 配信による公開審査）にて候補者によるプレゼンテーション及び質疑応答を行い、現地審査対象作品 4 点を選出。
2024 年 12 月～翌年 2 月　現地審査実施。
2025 年 2 月 17 日（月）　最終協議を経て、上記受賞者を決定。

ROOF HOUSE（ルーフハウス）
玉田脇本建築設計事務所 / 玉田誠＋脇本夏子

©小林久井

玉田誠（タマダ　マコト）
1986年 広島県生まれ
2009年 横浜国立大学工学部建築学コース　卒業
2011年 横浜国立大学大学院Y-GSA　修了
2011-2022年 山本理顕設計工場
2019年 玉田脇本建築設計事務所　共同設立
2022年- 国士舘大学大学院非常勤講師
2023-2025年 横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手
2025年- 関東学院大学非常勤講師

脇本夏子（ワキモト　ナツコ）
1987年 神奈川県生まれ
2009年 日本女子大学住居学科　卒業
2011年 横浜国立大学大学院Y-GSA　修了
2011-2024年 東 環境・建築研究所
2019年 玉田脇本建築設計事務所　共同設立
2021年- 日本女子大学非常勤講師
2025年- 芝浦工業大学非常勤講師


©Kenta Hasegawa

住まいを広げていく
敷地は町工場やのどかな田畑の風景が混在する地域で、宅地とその裏の広葉樹の雑木林を合わせて2000㎡ほどであった。都市部から移住した若い建主からは、緑豊かな敷地全体を使って暮らすこと、地域から人を呼び込む小さな商いができる場所があること、将来転勤した場合も住まいがうまく使えることが望まれた。そこで我々は敷地の豊かな緑に加えて、周辺環境や地域の活動も取り込めるような半屋外のニワと一体となった住まいを考えた。
建物をいくつかのボリュームに分け、その間に小さなニワができるように配置し、全体に一枚の薄い屋根を架けた。屋根の下は路地のような隙間、小屋裏のような屋上、大きなトップライトを持つ入れ子状の室内など、半屋内とも半屋外ともいえるような内外が混ざり合った空間となることを目指した。
半屋外のニワは室内と周辺の状況に応じて、さまざまな性格をもつ場所となる。雑木林を向いた中央のニワには屋外キッチンがあり、人を招いて桜を眺めながら食事をしたり、子どもが駆け回ったりする場所となる。敷地入口に面した南側のニワは、来訪者を迎え入れる軒先の玄関のような場所である。北側の壁に囲まれたニワは、日曜大工や車いじりなど、ここで暮らすためのさまざまな作業を行う場所である。
また、分棟形式とすることで、建主が転勤した場合にも寝室と風呂のある棟は別荘として残しながら、その他の部分を店舗やギャラリーとして他者が使うことを想定している。ニワを介して相互がゆるやかに関わり合うことで、住宅を超えた創造的な使われ方が生まれる場所になれば良いと考えた。
大屋根によってできた半屋外のニワが敷地内外の状況によってそれぞれ特徴的な場所となり、生活が室内で完結することなくニワへ、その外側へと広がり、この場所の自然や風土の中で日々の暮らしが営まれ、地域の住民や文化との豊かな関わりが生まれる住まいとなることを期待している。（玉田誠＋脇本夏子）

静原村の家(しずはらむらのいえ)
森田一弥 (もりたかずや) / 森田一弥建築設計事務所

1971 年 愛知県生まれ
1997 年 京都大学大学院修士課程修了
1997 年 しっくい浅原（~2001 年）
2000 年 森田一弥建築設計事務所設立
2007 年 Enric Miralles Benedetta Tagliabue Arquitectes
2011 年カタルーニャ工科大学留学
2020 年~ 京都府立大学准教授

京都市北部の山間の集落 静原における、古民家 4 棟のリノベーションである。最初に 1 棟の古民家を購入して一家で集落に移り住むことから始まり、自力施工も含めて少しづつ改修工事を行いながら、設計者の自宅+建築設計事務所としての環境を整えていった。その後、隣接する複数の空き家を譲り受けたことをきっかけに、独立した設計室、藍染の工房、宿泊施設への改修も数年間かけて断続的に行なってきた。その結果、家族が生活し設計事務所スタッフが働く場所だけでなく、集落を訪れる旅行者の滞在の拠点となり、また地域住民の集いの場としても機能する、多様な人々が行き交う多機能的な古民家群を作り上げた。

複数の空き家を改修するにあたり、自宅や設計事務所など、通常は一つの建物にまとめるべき機能を複数の建物に分散させた。また、各建物の道に面する場所には大きなガラス窓を設け、薪で暖をとる場所を各所に設えた。そうすることで、家族やスタッフが近隣の人と出会い、何気ない挨拶や日常会話を交わしたり、またこの地域の豊かな自然や季節の変化を感じる機会を創出し、衰退しつつある集落に人間の営みとそこに暮らす喜びを取り戻そうとしている。

敷地内の各所は、市内で伐採された樹木や、廃棄された古民家の建具や解体された木材、土壁、瓦などが ストックされている。それらの素材は、乾燥させて冬季の暖房の薪になり、必要に応じて敷地内の改修工事に再利用されるだけでなく、各地の建築現場にも供給されてゆくことで、集落を超えた素材の循環の中継地ともなっている。（森田一弥）